

久米絵美里

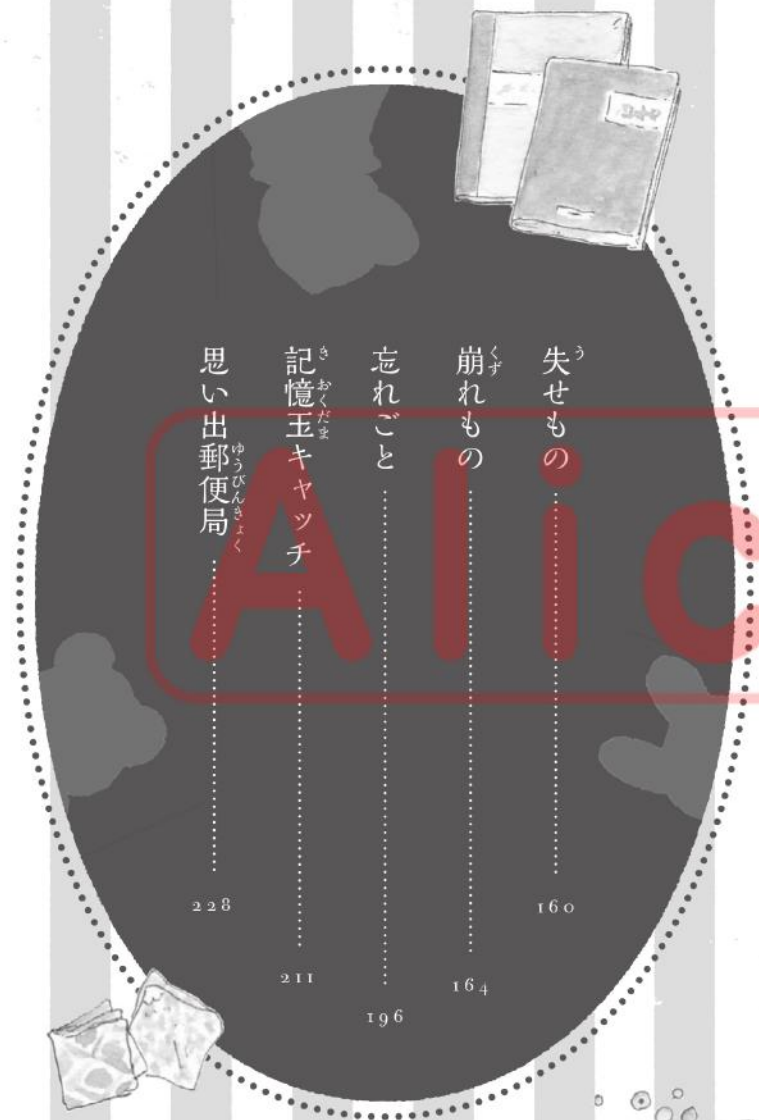
なんでもの



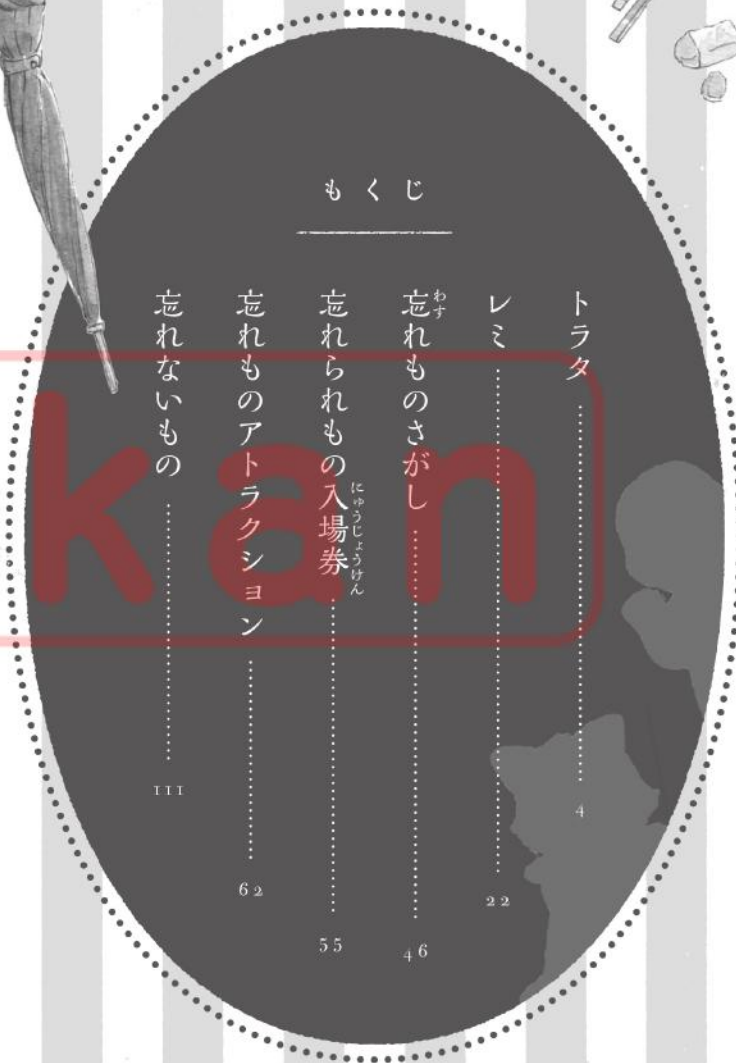
Alicokan

遊園地

かわいみな / 絵



contents





トラタ



うっわ、どうしょ。

忘れた。また、忘れた！

朝、学校に続くいつもの道で、おれは足に急ブレーキをかけてよろめく。顔が、まっさおになった。

なにしろ、また、忘れてしまったのだ。

担任の吉武先生から、何度も何度も何度も持ってくるようにと言われていた、あのお知らせのプリント。今度、学校でやるバザーに参加するかどうか、母ちゃんから返事をもらってこなければならなかったのに、忘れてしまった。

ちなみに、しめきりは三日前の月曜日。

月曜日は、当然ふつうに忘れて、火曜日も忘れ続けた。というより、そもそもプリン

トを母ちゃんに見せることを忘れていて、プリントはずっと、おれのランドセルの中で眠りこけていたのだ。

六年生にもなってプリントひとつ出せないのか、小一からやりなおしたほうがいいんじゃないか、なんて、イヤミたつぷりに二日続けて先生に怒られて、火曜日の夜によく母ちゃんにプリントを見せた。でも、母ちゃんが飯をつくってるところに話しかけたもんだから、

「え？ なに？ あとで見るから、とりあえず、そこおいといて」

って言われて、プリントはテーブルの上におきっぱなしになって……。

そんなこんなで、きのうも、やっぱり忘れた。

で、きのうの夜、母ちゃんが、

「これ、書いておいたから、ちゃんとあした、先生にわたしといてよ」

って言ってきたんだけど、あれは母ちゃんが悪い。おれは、ちょうどアブリで野球のゲームをしていて、そのときピッチャーが投げた球を打ちかえさなきゃ、三振になるところだった。だから、「んー」って、テキストに返事して、場外ホームラン打ってたら、これだよ。

また、忘れたよ。

おれは、今、必死に走ってきたばかりの道をふりかえり、そして、これから走っていかねければならない道を見すえる。

ここは、家と学校の、ちょうどまんなかへん。

どうしよう。取りに帰るか？

いやいやいや、そんなことしたら、遅刻^{ちこく}する。おれのこの足じゃ、ぜったい無理だ。遅刻^{おそ}して怒られるか、忘れ^{わす}れもので怒られるか。

どっち？ どっちだ？

左足は、遅刻がいやで走りだそうとして、右足は、忘れものがいやで帰ろうとする。道のまんなかで体をねじらせて、おれは悩^{なや}んだ。

どっち？ どっちなんだ！

そのときだった。思ってもみない方向から、声がした。

「忘れものですか？」

紅茶^{こうちや}と緑茶とほうじ茶がごっちゃになって、ぬるくなったかのような、のほほんとしたふしぎな声。ふりかえると、そこには、ひよろりとしたのっぽのじいさんが立っていた。

しよぼしよぼとした小さな目は、長くのびた白髪^{しろがみ}まゆげに隠^{かく}れて、よく見えない。

きつちりとなでつけられた白髪頭に、同じ色の手入れされた口ひげ。上下ともにまつしろな服はおかしなくらいにちゃんとしていて、なんか、城^{しろ}とかでつかい屋敷^{やしき}とかにいるやつみたいだ。あの、だいたいセバスチャンみたいな名前のやつ。あんまりにも全身まつしろで、胸ポケットにささった黒い万年筆が、おかしく見えるくらいだった。

と、おれが、変なポーズのままかたまつて、そのじいさんをじろじろと見ていると、じいさんはコホンとせきをしてから、もう一度、言った。

「忘れもの、ですか？」

それでおれは、はっと我^{われ}にかえつて、じいさんに向きなおる。

「あ、えっと、そう、忘れものして……。あーっと、その……」

とつぜん、知らない人に話しかけられたもんだから、あせつて、言葉が出てこなくなる。もごもごもごもご。言葉も、おれの口の中で、右足と左足がからまったらしい。

けどじいさんは、こっちのことなんか、ちっとも気にしてない感じで、こくりとひとつなずくと、うしろにあったとびらに手をかけた。

「では、どうぞ、こちらへ」

さらりと言われて、おれはますますとまどう。

どうぞと言われましても。



おれは、じいさんがおれを招きいれようとしている建物を、まじまじと見つめた。こんなところに、こんな店、あったっけ？

人通りの多い大通り。看板はなく、大きな窓は、どれもくもりガラス。灰色の、四階建てくらいのコンクリートのビルの一階。

あやしい。あやしすぎる。

おれは、とびらをあけて待っているじいさんにむかって、小さく首を横にふった。いやです。おれは、そこには入りません。

声には出さずに、そう言ったつもりだった。

すると、じいさんのふさふさとした長いまゆげの両はじが、しょんぼりと下がる。

「信じてください。わたくしはただ、忘れものをおわたしただけなのです。あなたさまの忘れものは、『日曜日のバザー』の出欠プリント、お母さまのサインつき」。そうですね？」

おれは、はっと息をのんだ。目がまるくなっているのが、自分でもわかる。

なんで？　なんでこのじいさん、おれの忘れもの、知ってんだ？

おどろいているとじいさんは、勝手に話を進めていく。

「少し、ここでお待ちいただけますか。今、取ってまいりますので」